

現代アートで島を再生

中田 本日はよろしく願います。秋元さんが館長をされている東京藝術大学は横浜とのかかわりがあります。

秋元 そうでしたね。中田さんが横浜市長時代、横浜キャンパス映像研究科でお世話になりました。

中田 秋元さんとの接点は他にもあります。

秋元さんは以前、瀬戸内海の直島にある、かぼちゃのモニュメントで有名な「ベネッセ・アートサイト直島」の館長でしたね。その頃に、私は二回、そこに行っているのです。最初はモネの集いのオープンングだったと思います。安藤忠雄さんと一緒でした。

秋元 それは二〇〇四年ですね。一番大きな内覧会でした。安藤さんは一九九一年のオープン当初からかかわっていますから。

中田 秋元さんもオープンからですか。

秋元 そうです。立ち上げスタッフの一人でした。二〇〇六年まで館長を務めました。

中田 立ち上げスタッフということは、直島に常駐されていたのですか。

秋元 いいえ、ベネッセの本社がある岡山市に住んでいて、岡山と直島を行ったり来たりしていました。私は美術要員といいますが、たまたまベネッセの公募があつて、受けてみたら受かつちやつたんです。

中田 キュレーターですね。

秋元 ええ、そうです。「学芸員募集」という記事が新聞に出ていたんです。新聞で学芸員募集があんまりないですよ（笑）。今

でこそ、直島も現代アートによる町づくりのモデルケースになっていきますけど、当時は何もない所でした。

中田 何もない島を、アートでおもしろくしようとしたわけですね。

秋元 初めからそこまではつきりした意図があつたかどうかはわかりません。地域おこしや町づくり的な観点で、現代アートを始めたわけではないんです。初めは現代アートのスペースがある、リゾートホテル的な発想が強かつたと思います。民間の企業ですから。

中田 福武総一郎さんも（現ベネッセホールディングスCEO）、かなり思い入れがあつたのではないのでしょうか。

秋元 だと思えます。ただ、福武さん自身が徐々に直島の魅力に気づいていったような気がします。やっつけていくうちに、どんどん思い入れが強くなっていったんでしょうね。

中田 あの美術館は個人的でおもしろいですよね。近くにあつても行かない美術館はたくさんありますが、あそこは島全体がアートになつていて、美術館が目的で多くの人が訪れています。一風変わったアートが展示されているということで、行ってみたい美術館として有名になりました。

秋元 オープン当初はそんなじゃなかつたですけどね。建築は安藤忠雄さん、オープンの展覧会は三宅一生さん、次に勅使河原宏さんと、ビッグネームを使って鳴り物入りで始めたけれど、来場者はパラパラと来る程度。

展覧会が終われば潮が引いたようにお客さんが来なくなりました。そんな状態が数年続きました。

中田 それを、どうやって変えたのですか。

秋元 これはもう普通にやってもダメだというところで、常設型の美術館にしたいんです。あの場所まで行く理由を美術館側で作らなければ、いつまでたつてもお客さんは来ないだろうと。

中田 島ですからね。よほどの理由じゃなければ、わざわざ行くとは思わないでしょう。

秋元 他の美術館にもありそうなものを、何時間もかけて見に行こうとは思いません。だったら、ここでしか見られないものを作ろうと、とにかくそれだけを考えました。そこで、一般の人たちにとって意味があるかどうかは別として、アーティストがどうしても見たいと思う作品が、そこに行けばあるという状態を作っていくことに注力しました。

中田 今ではアーティストや現代アートファンに限らず、観光地として多くの人が訪れる場所になりました。一方で、住民の反応はいかがでしたか。

秋元 最初は反対意見が多かつたですね。よくわからないし、これのどこがアートなんだという感じでした。

中田 そうでしょうね。私も横浜市長時代、横浜トリエンナーレにかかわった時、最初は現代アートというものがわかりませんでした。単におもしろいとか、名前だけ説明されても

わかりません。その場所に行つて、感性にフィットするものがあつたり、自分自身でももしろいという発見があつて初めて他のものも見てみようという気になります。日本で現代アートが美術のジャンルに登場したのはいつごろですか。

秋元 現代アートが一般化したのは、一九八〇年代くらいだと思います。

中田 そんなに最近ですか。

秋元 ええ。現代アートという言葉になつたのが八〇年代くらいです。それまでは「前衛アート」や「前衛美術」と言っていました。

中田 そうでした。前衛と聞くと、奇抜で意味不明というイメージがあります。それに、進歩的で先を行つているというか、今までにない、非伝統的というのでしょうか。前衛アートは亜流として扱われていたように思います。

秋元 中心ではないですね。多数派ではなく少数派です。思想的にもかなりラディカルというか、左よりの考え方でし、反伝統で、古いものは全部壊していくというのが前衛と呼ばれていました。

中田 当時の美術界の重鎮たちは、快く思つていなかったでしょう。

秋元 ほとんど認めていませんでした。**中田** 今ではジャンルとしても認知されています。

秋元 世の中での位置づけが変わつてきたのでしょうか。それまでは、単に批判的だった

り、極端な見方をするというのが前衛芸術の特徴でしたが、だんだん社会性を帯びてきたことが要因だと思います。たとえば、戦後の「LOVE & PEACE」のような社会現象や運動と結びついたことで、前衛アートが若者たちの言葉を代弁していくものになっていきました。その頃からです。単なる少数派や脇役から、新しい世代や新しい時代を象徴するものに変化していったのは、それが六〇年代、七〇年代頃ですね。

中田 世界で現代美術館が建設され、認知された最初の場所はどこですか。

秋元 現代アートを前面に出したのは、パリのポンピドゥーセンターです。それまでの美術館とはまったく異なる建築で、外観のイメージだと、何かを製造している、生産している工場のような美術館です。芸術というのは今を生み出していくものだという、メッセージ性の強い建築です。

中田 今を生み出していくということは、新しいものが生まれるということでもあります。現代アートがそうであつたように、新しいものが出現したときは、反発に遭うことが多いですね。ですから、直島の人たちの反対意見もわかる気がします。

秋元 そういうものつて、ある一定の時間は必要ですし、いろいろな方向からアクセスできる人口を作っていくことが大事だと思えます。直島も時間をかけたから良かったんだと思いますよ。私は十五年間かかわりましたけ

中田 「採算性がなくても社会にとって必要だと思ふ人がいないと、芸術や美術は振興されません」
秋元 「長い時間をかけたからこそ、住民の理解が得られたのだと思います」

ど、長い時間をかけたからこそ、住民の私たちの理解が得られたんだと思います。

中田 辛抱強くやろうというのが福武さんのスタンスだったのですね。

秋元 そうだと思います。トップの意向というのは特に重要で、そこがぶれちゃうと反対意見につぶされますからね。

中田 最初から採算性などを考えていたらできなかつたでしょうね。あの美術館はベネッセの文化的事業、広くは社会的貢献の一環だったのではないのでしょうか。

秋元 福武さんはとてもユニークな人で、社名を「福武書店」から「ベネッセ」に変えるとき、哲学的なメッセージを発信していました。事業形態の軸を、ベネッセというフィロソフィーの詰まった一面と、文化的事業の一面の二本立てで考えていたようです。つまり、ベネッセの哲学的な一面を具現化したものが直島事業だと。上場する以前から、福武さんは文化に貢献したいと思っていたのかもしれませんが。直島事業が採算ベースに乗らなくても社会にとって必要なものとして考えていたんだと思います。

中田 そういふ人がいないと、美術や芸術というのは振興されません。

秋元 そうでなければ、あのような過疎化したエリアで何かをやつていこうなんて、なかなか思わないでしょう。

中田 その後、十五年間の直島での実績を買われ、金沢21世紀美術館の館長に就任したそうですね。どういう理由からですか。

秋元 「美術館をもっと市民に浸透させてほしい」「工芸を大切にしてほしい」ということを、当時、金沢市長だった山出保さんから依頼されました。山出さんは九〇年代からすでに金沢の町づくりに取り組んでいて、その最たるものが金沢21世紀美術館だったのです。

中田 入場者数が国内最高で、年間二三〇万人を超えています。

秋元 今ではもつと多いと思いますよ。

中田 二〇一五年のデータによると、二三七万人です。東京の名だたる美術館を抑えて一位です。二位が国立新美術館の二二九万人、三位が国立科学博物館の二二二万人、そのあとは東京国立博物館と続いて、森美術館が約八四万人、東京都現代美術館がおよそ四〇万人。それに対して金沢は二三七万人ですか。桁が違います。

秋元 文化施設だけじゃなくて、動物園やテ

ーマパーク、たとえばデイズニールランドなどを含めても、おそらくベスト五〇ぐらいに入っているんじゃないでしょうか。

中田 ちなみに、横浜美術館も評判ではいっても上位にランクインします。しかし、来場者数から見ても、金沢21世紀美術館はすでに観光地ですね。当然、美術に関心がない人も訪れるでしょう。

秋元 ええ、「これ何だろう？」と興味をもつて訪れる人もたくさんいます(笑)。美術館の斜め向かいには、有名な兼六園がありますからね。ついでに見に来るのでもいいんです。美術館は町づくりのひとつですから、美術に関心がある人もない人も、美術館に来て大いに楽しんでほしい。町の発展にもつながりますからね。

中田 三、四年前に行ったとき、プールのような展示がありました。あれは常設ですか。

秋元 常設です。一番人気があるんですよ。

中田 でしょうね。上から見るとプールで、下から見ると水中のようで、頭上に人がぼんやり映っているという、不思議な空間でした。

秋元 あのプールの展示は、直島のかぼちゃのように、今では金沢21世紀美術館を象徴するものになっています。

